

『東方』二八三号より

中国都市史研究の 嶄然たる精華

川越泰博（中央大学）

歴史学者としての川勝守氏において、めざましいほど一貫して変わらないのは、何とも多彩で根限りな仕事をする姿である。氏が、雄篇「張居正丈量策の展開——特に明末江南における地主制の発展について」（『史学雑誌』八〇—三・四、一九七一年）をひっさげて学界に登場して以来、この三十年余の間、陸統とものされてきた論文・著作を総覧して、それらを一口で形容しようとすれば、「多彩」かつ「根限り」という言葉がもつともふさわしい。これまで上梓された著作のテーマだけをとりあげても、それぞれ、明清時代の賦役制度史、農業経済史、市鎮社会史、日本近世と東アジア世界、聖徳太子と東アジア世界、であることを思えば、「多彩」かつ「根限り」という形容詞が、決して的外れではないことが知られよう。このたび上梓された本書は、著者固有の「多彩」かつ「根限り」の爆発感を最も如実に感じさせる大作である。

本書は、まず、開巻冒頭に五十二葉に及ぶアート紙使用の口絵写真、巻末に資料図版約四十を掲出し、それに加えて、文中に挿図二十五余・図版七十五余を収録する。これらが論旨理解の上で好個の材料となっていることは言を俟たない。本書は、四部構成、全十五章建て、これに序章・終章を付す。内容を簡単に紹介すれば、つぎの通りである。序章では、「中国江南城郭都市社会史の問題点」と題し

川勝守著

『中国城郭都市社会史研究』

B5判・七九〇頁・汲古書院・一五、七五〇円



て、殷周以来の中国城郭都市に関する研究の学説史の整理を行い、本書における問題研究課題と研究視角を設定している。本書が、宋以後一千年の江南城郭都市の研究を意図し、かつ中国城郭都市史と城郭都市社会史との結合を目標としているのは、学説史上における主要な研究に対して、その長所と短所を綿密に計量し、それを踏まえた結果である。五十頁を越すこの序章は、先行文献をどのように読むか、そこからいかなる問題点を剔出するか、^{さすが}追に老練な腕の冴えを見せた方法序説でもある。

第一部は、「中国城郭都市の基本性格」と題し、中国都市が城郭を構える必要性を中国史の中で探る試みとして、第一章では、元王朝の江南都市の攻略、清王朝の中国城郭都市の攻略を取り上げて、異民族王朝の侵入と中国城郭都市の関連を検証して、前者元王朝と後者清王朝の相異をあざやかに描き出している。第二章では朱元璋（明太祖）による張士誠の本拠地蘇州城攻撃と集慶（南京）城攻撃、鄧

▼ 『東方』283号より
一 中国都市史研究の嶄然たる精華
▲ 川越 泰博

クリックすると次の段にジャンプします。

茂七の乱と福建の城郭都市との関わり、王陽明による少数民族対策と新県設置問題、嘉靖倭寇と沿海地方の城郭都市の関係を素材に、政治動乱と城郭都市との関連を探り、城郭都市が戦争規模にまで拡大した武力衝突に対しても有効な防御機能を果たしたことを実証した。第三章では、明太祖が国都と定めた南京建設が、徐達や常遇春とともに数々の城郭戦争、城攻めを経験して来た上での建設であり、その建設には、直隸十八府州、江西の九江・饒州・南康三府から均工夫を召集して工事に当たらせたことを明らかにした。

第二部は、「中国城郭都市の建設と管理行政に関する研究」と題する。まず、第四章では、『諸司職掌』に見える南京宮城の城池建築規定と正徳・万暦両方の『大明会典』の内府宮城及び各府州県城の城池建築規定を検討して、明代に制度化された工匠制度によって、国家公営事業の一環として、宮城をはじめ各地の城郭建設工事が施行されたことを実証した。前章を承けて、第五章では、さらに、工匠制度の施行実態を検討する。具体的には、浙江の嘉興府嘉興県城・秀水県城・嘉善県城、湖州府烏程県城、南直隸の蘇州府呉県城・崑山県城・太倉州城、松江府上海県城を取り上げて、明代江南城郭都市の建設と管理の実態を検討し、その結果、各府州県は明代後半期になると、工匠制度を利用することができず、公帑金（一般財源の税金）から財政支出する他はない状況にあったことを明らかにし、併せて、嘉靖倭寇期以後には、地方官が自己の俸給の一部を提出して、池濠修理などの工事施工を呼びかけた事例も抽出された。第六章では、『福惠全書』『天台治略』などの清朝の各種行政書の関係記事を検討して、清代においては府州県城郭の建設費と管理費は予算化されておらず、戸部か

▶ トップページにもどる

らの支出は全くないこと、そのために地元負担が多くなることを述べている。

第三部「中国城郭都市社会の研究」は、内容的に二分割される。第七章・第十章は、下層都市住民の分析である。第七章は総論部分に相当し、十四世紀後半以来の明代里甲制度が、十六世紀に入って急速に解体される過程で析出された、居住定まらない借家・借間住まいのさまざまな下層都市住民を抽出し、それらが明末江南都市の社会構成上、重要な位置を占めるに至ったことを明らかにし、次章以下では、それぞれ、下層都市住民たる下級兵士・訟師・打行・訪行の存在形態を分析する。一転して、第十一章・第十二章では、郷紳・地主と都市との関係に問題を設定し、第十章では、清初の徐乾学一族をとりあげて、江南郷紳の地域支配の具体像を探り、第十二章では、九州大学所蔵の租棧関係簿を紹介しつつ、地主租棧がなぜ蘇州や無錫などの県城、それも巨大城郭都市に所在したかという問題に迫ろうとした。

「中国城郭都市の生活と文化」と題する第四部は、南京都城内外の仏教寺院や道教宮觀など宗教施設の変遷を辿り、それらが都市機能や都市生活文化といかなる関連にあったかを考察した長大な雄篇（第十四章）を挟んで、その前後には、『明儒学案』のデータ・ベースを作成して明代の儒学と城郭都市との関連を検討した第十三章と、南京・蘇州における共同墓地・義塚のハード面の機能と役割を考察した第十五章を配置している。

そして、最後に、終章では、戦前の実態調査記録をもとに、中国城郭都市の規模、城壁と城門の構造など、城郭都市の空間サイズに関する諸事項を測定し、併せて、当該調査記録について今後のさらなる活用を期して結びとしている。

る。

以上の内容構成の紹介からも窺われるように、本書は、城郭都市史研究を単に建設史および変遷史などに局促せず、その城郭の社会との関連、具体的には南京・蘇州・杭州・常州・鎮江・湖州・上海などの県城・府城・巨大都市を対象に、城郭都市における政治・行政・軍事・司法・教育・文化などの機能・構造の形態と城郭都市建設史とを、既発表論文と書き下ろし論文とをもって融合かつ総合させて解明しようとしたものである。そのために、第一部・第二部が城郭都市建設史にあてられ、第三部・第四部は城郭と社会との関連史に焦点を絞っている。いうなれば、前者は縦軸、後者は横軸といえよう。この二つの軌軸を違和感なく融合する役割を果たしているのは、あらゆることから、歴史の大きな「脈動」「うねり」「ひろがり」に収斂していくという姿勢である。したがって、読者は、どの章を開こうとも、つねに時代の風景を味わいながら、この大作を読むという幸福感に浸れるのである。

本書は、大判で二段組み、八百頁になんなんとする、文字通りの持ち重りする大著である。その圧倒的な重量感と圧力は、読者をして本書の繙読を一寸ばかりたじろがせるかもしれない。しかしながら、案に相違して、開巻劈頭より、本書には引き込まれる。そして、最終頁に至るまでの数日間、読者を虜にして離さないであろう。饒舌なほどの文章構成、明確な論旨の組み立て、それにまして、本書の魅力は、著者の歴史家としての感受性の横溢と躍動にある。それらが、読者を虜にし、響震させる所以である。

本稿の題目としてかかげた「嶄然^{ざんぜん}」^{ざんぜん}ということばは、ひととき高くそびえることの意であるが、以上により、それが決して過褒でないと解っていたただけである。加藤繁

今月の『東方』

書評目次へ

トップページにもどる

博士によって開拓された中国都市史研究は、爾後、日野開三郎・斯波義信・妹尾達彦氏らによる力作・雄篇な研究の蓄積によって、いまや仰ぎ見る連峰の山々のような姿を形成している。本書が、それらの山々に連なる松山^{すうざん}であることは贅語を要しない。「山高き故に貴とからず、樹有るを以て貴しと為す」というけれども、本書の山容は巍巍^{きぎぎ}にして、すぐれた究覈^{きゅうかく}の形姿がある。本書は、膨大な漢語史料と実測データを読み解き、絶えざる鍛冶によって磨きをかけてという、まさに「根限り」な営為によって具現化された精華の究極相であると言いうる。この言をもつてしても、書評子は、決して阿爺^{あやのかかん}下領^{げりやう}（物事を見分けることができないう愚か者）の指弾をうけることはないであろう。なぜならば、本書を繙けば、その言の当否は、おのずと自明になることであるからである。

とあれかくあれ、本書は、姉妹編である『明清江南市鎮社会史研究——空間と社会形成の歴史学』（汲古書院、一九九九年）とともに、これからの元明清時代に関する中国都市史研究の本格的な胎動と牽引の役割を、永終、担っていくことであろう。この本は著者がこれまでおこなってきた多くの研究を基礎として成り立っている。そしていままでの研究を再録した論集ではなく、中国王権の実態を明らかにするという目的で改めて書かれた研究書であるといえる。ここに既発表の論文を表示することはさけるが、より理解を深めるならば、それらを読む必要がある。

本の装丁や文章表現は親しみやすくお値段も手頃であるが、内容はそれに似合わず非常に豊富である。ぜひ、熟読をお勧めする一書である。